一般演題（1B8-3）

重度頭部外傷後遷延性意識障害患者へのNASVAスコア各6項目を用いた肺炎発症要因の検討

野村　宜靖[1]、岩井　歩[2]、森　美香[2]、大塚　誠士[2]、横山　奈美[2]、槇林　優[2]、浅野　好孝[2]、篠田　淳[2]

[1]木沢記念病院 総合リハビリテーション部、[2]木沢記念病院 中部療護センター

【はじめに】昨年の本学会で重度頭部外傷後遷延性意識障害患者の肺炎発症要因を検討し「経口摂取をしていない」「呼吸器疾患既往歴がある」「気管切開がある」「高いNASVAスコア」のいずれかを満たせば肺炎が発症しやすい事を報告した。今回、この中でもNASVAスコアの各6項目に着目し、それぞれを比較する事で肺炎発症要因をより詳細に検討できたので報告する。
【方法】対象は中部療護センターにH19年～H25年に入院した重度頭部外傷後遷延性意識障害患者45名。調査1.入院初期（入院～半年）の肺炎発症者数・入院時NASVAスコア各6項目「運動」「摂食」「排泄」「認知」「音声発語」「口頭命令の理解」を調査し、肺炎発症群（16名）・非発症群（29名）の2群に分け入院時NASVAスコア各6項目の点数で比較した。統計は有意水準を5％とした。調査2.入院初期に肺炎を発症した16名のその後を追跡調査し1年後の肺炎発症者数・NASVAスコア各6項目の変化値（入院時NASVAスコア－1年時NASVAスコア）を算出した。その結果から肺炎再発群（4名）・非再発群（12名）の2群に分けNASVAスコア各6項目の変化値で比較し傾向をみた。
【結果・まとめ】調査1の結果「運動」「認知」「摂食」で有意差を認め入院時にいずれかが高値だと肺炎を発症しやすい可能性が示唆された。調査2の結果「認知」で差がある傾向が示された。1年後の肺炎発症者数が減少した要因が今回は「認知」のみであったが、今後はリハビリ・看護によるケア等の影響も視野に入れ検討していきたい。